

尾形明子

昭和文学の女たち

ドメス出版

尾形明子

昭和文学子の女

ドメス出版

**尾形 明子** おがた あきこ

早稲田大学第一文学部日本文学科卒業  
同大学院博士課程修了

東京女学館短期大学助教授

『女人芸術の世界——長谷川時雨と  
その周辺』(ドメス出版)

『女人芸術の人びと』(ドメス出版)

『作品の中の女たち——明治・大正文  
学を読む』(ドメス出版)

『現代文学の女たち』(ドメス出版)

『近代女流文学』日本文学研究資料叢  
書編・解説(有精堂)他

## 昭和文学の女たち

1986年12月20日 第1刷発行

1989年6月15日 第2刷発行

定価 1648円(本体1600円・税48円)

著者 尾形明子©

発行者 鹿島光代

発行所 株式会社 ドメス出版

東京都豊島区駒込1-3-15

振替 東京 8-48766

電話 03-944-5651

印刷所 有限会社 教文堂

製本/明光社 装本印刷/形成社

落丁・乱丁の場合はおとりかえます

昭和文学の女たち／もくじ

政治と芸術のはざままで (昭和元年～十年)

平林たい子「治療室にて」の私	9
田山花袋「百夜」のお銀	13
嘉村礪多「業苦」の千登世	16
谷崎潤一郎「卍」の光子と園子	20
山本有三「波」の女たち	23
野上彌生子「真知子」の真知子	27
林芙美子「放浪記」のお芙美さん	32
谷崎潤一郎「蓼喰ふ虫」の美佐子	37
島崎藤村「夜明け前」の女たち	41
堀辰雄「聖家族」の母と娘	45
尾崎翠「第七官界彷徨」の町子	49
丹羽文雄「鮎」の和緒	53
尾崎一雄「暢気眼鏡」の芳枝	57

石坂洋次郎「若い人」の江波恵子……………	60
谷崎潤一郎「春琴抄」の春琴……………	64
宇野千代「色ざんげ」の女たち……………	68
川端康成「雪国」の駒子……………	72
徳田秋声「仮装人物」の葉子……………	76
吹きすさぶ嵐の中で（昭和十一年～二十年）	
佐多稲子「くれない」の明子……………	83
岡本かの子「鶴は病みき」の葉子……………	88
野上彌生子「迷路」の多津枝と万里子……………	92
堀辰雄「風立ちぬ」の節子……………	97
岡本かの子「母子叙情」のかの女……………	101
永井荷風「溼東綺譚」のお雪……………	105
堀辰雄「かげろふの日記」の私……………	109
中河与一「天の夕顔」のあき子……………	113

岡本かの子「老妓抄」の老妓……………	117
高見順「如何なる星の下に」の女たち……………	121
佐多稻子「素足の娘」の桃代……………	125
織田作之助「夫婦善哉」の蝶子……………	128
田中英光「オリンポスの果実」の秋子……………	131
堀辰雄「菜穂子」の菜穂子……………	134
徳田秋声「縮図」の銀子……………	137
高村光太郎「智恵子抄」の智恵子……………	140
芹沢光治良「巴里に死す」の伸子……………	144
谷崎潤一郎「細雪」の四姉妹……………	147
瓦礫の中から (昭和二十一年～二十五年)	
宮本百合子「播州平野」のひろ子……………	153
佐多稻子「私の東京地図」の私……………	156
加藤道夫「なよたけ」のなよたけ……………	160

平林たい子「かういふ女」の私……………	163
宮本百合子「二つの庭」の伸子と多計代……………	166
丹羽文雄「厭がらせの年齢」のうめ女……………	169
田村泰次郎「肉体の門」の娼婦たち……………	172
太宰治「斜陽」のかず子……………	175
宮本百合子「道標」の伸子……………	178
宇野千代「おはん」のおはんとおかよ……………	184
林芙美子「晚菊」のきん……………	187
木下順二「夕鶴」のつう……………	190
川端康成「千羽鶴」の女たち……………	193
川端康成「山の音」の菊子……………	196
谷崎潤一郎「少将滋幹の母」の北の方……………	199
円地文子「女坂」の倫……………	202
林芙美子「浮雲」のゆき子……………	205

大岡昇平「武蔵野夫人」の道子……………	208
三島由紀夫「愛の渴き」の悦子……………	211
あとがき……………	214

企 画 ユーウ企画  
 装幀・題字 利根川 裕

● 政治と芸術のはざままで (昭和元年～十年)



## 平林たい子「施療室にて」の私

昭和文学の特色のひとつに、女性作家の開花があげられよう。

明治、大正と文学史上に記された女性文学の数はきわめて少なく、その質も、樋口一葉、与謝野晶子、田村俊子ら何人かを除けば高いとは言いがたい。が、大正末から昭和にかけて、男の作家にいささかの遜色もない女性作家が次々と生まれる。彼女たちはそれぞれ個性豊かな作品を発表し、その生を問いかけ、書くことを通して人間であることの意味を確認していく。

とりわけ女性に重い現実に対して「私もまた人間なのだ」という人間宣言の場が文学だったといえよう。人間であることをおそらくは疑ったことさえないであろう男の作家たちに比べて、それはひどくまわりくどい手続きには違いなかった。

が、このスタートラインのハンディが、彼女たちに、男の作家とは明らかに異なった人間認識、現実認識の目を与える。男の作家が素通りしてしまったさまざまな個所に、彼女たちは躓き、拘泥し、抵抗していく。それは、たとえば明治末から大正にかけて『青鞥』に集った女性た

ちをも突き動かした、いわば女性文学の原点でもあるのだが、それらがただちに文学として結晶することは難しい。

そして、明治や大正の時代に文学に志し、文学にその生を託した多くの女性たちの情熱や夢を養分として、昭和期、ようやくに女性文学が開花する。文学史に女性の作家を追いながら、開花するまでに要した歳月を思い、文学が書き手と読者の微妙な相関関係にあることを改めて思う。

そうした女性作家のひとりに平林たい子がいる。女の体の底に澱のように沈んだ情念や感性、体験や思想を骨太なリアリズムをもって描き続けた作家だった。

昭和二年九月『文芸戦線』に発表された「施療室にて」で、平林は作家としての地位を定める。舞台は当時、日本の支配下にあった満洲の慈善病院。アナーキストのグループに属する「私」は、夫とともに満洲に渡り、馬車鉄道社の女中をしていたが、線路破壊テロを計画した夫と一緒に捕えられる。臨月の体だった「私」は、監視付きで慈善病院の施療室に入れられるが、そこは陰惨な金もうけ主義の病院だった。「私」は重い脚気に苦しみながら女の子を産んだ。

「私」は、赤ん坊のために牛乳を求めると取り合ってもらえず、そのために毒を承知で脚気の乳を与えてしまう。赤ん坊は音を立てて乳を吸い、「私」の心に母親としての実感が込み上げてくる。が、子供はその夜からひどい下痢を起こし、明け方に死ぬ。

看護婦が明るく告げる。「ほんとお気の毒、ちょうど四時に亡くなったのよ」。

そして「私」も平気な声で「そうですか」とだけ答える。翌日、「私」は入獄の手続きをとり、監獄に向かうのだった。

若い日の作者の体験を描いたこの作品は、今も鮮烈である。満洲も、ヒロイズムに酔った若者たちのテロ行為も、慈善病院とか監獄とかも、今ではすっかり風化したイメージでしかないが、脚気の中で子供を産み、毒と知りながら本能的に乳を与えてしまう若い母親の姿に、私たちは衝撃を受ける。

出産に伴う怖れ、激しい苦痛、そのあとの安らぎと急に体内が空っぽになってしまったような不安。初めて子供に乳を含ませる時の戸惑い。そして少しずつ実感として広がっていく母親になったことの喜びと、乳を吸う子への切ないような愛情。

それらはいかなる時代であろうと、どのように恵まれた条件での出産であろうと、変わることはない女性だけの体験であり、だからこそ私たちは、脚気の乳を子供に与えた母親を、男の論者が言うように、子供を殺し自分だけが生き残ったとただ切り捨てて終わるわけにはいかない。「私」の姿も、作者の思いも、あまりに痛ましく重い。

が、そうであっても、やはり私たちは、脚気の乳を子に与える母親を認めるわけにはいかないし、「私」の行為にどこかひどく投げやりなセンチメンタリズムをかぐ。母性とは、母親とは、少なくともそんなに安っぽく、エゴイステックなものではないと叫びたくなる。

もとより男社会が創り上げた母性神話で「私」を批判するつもりはない。が、母性とは基本的には生き物としての本能であり、だから私たちは、自分の命の続きとして生まれたばかりの子供を抱くし、自分の命をたとえ賭けることになろうと、その命を守り抜く術を、まず考えることだろう。

後に書かれた自伝小説「砂漠の花」と比べるなら、子供の死の様子はかなり誇張されているし、フィクションにすぎない。そこにプロレタリア文学としてこの作を書くにあたっての作者の工夫や意図もあるわけだが、「私」の行為に、たとえほんのわずかであっても、政治や権力へのレジスタンスが含まれていたとしたら、それは許しがたい程に愚かしい。子供の命と引き換えにし得る程の思想や信念などあるはずもない。

平林の描く女主人公はいつも強烈な衝撃を私に与えるのだが、同時に拒絶感をも与える。生理的不快感といってもいいかも知れない。そして、だからこそ平林という作家も、その女主人公も私の中で鮮やかに在り続ける。

それにしても、今、脚気の母親の乳を飲まされて死ぬ赤ちゃんはいない。乳を通して母親は、愛情や夢や希望のすべてを子供に与えることができるわけだが、同時に、気付かぬうちに今の時代を生きることの不安や苛立ち、悲しみや怖れをも、あるいは与えているような気もするのだが、どうだろうか。

## 田山花袋「百夜」のお銀

昭和の初め、文壇にはプロレタリア文学、新感覚、ブルジョア文学の三派が鼎立していた。

人間平等を旗印として帝政を倒したソビエトを理想国とし、そうした国家をつくるために文学を役立てようとするプロレタリア文学は、文学に思想をもたらし、その裾野を広げ、表現に新しさを盛り込み、都会的な感覚で文学を描いた新感覚派は、横光利一や川端康成の文学に結実したが、それらの新しい若い世代の文学に挟まれながら、いわば旧派に属するブルジョア作家たちは、ただ黙々と己の文学を書き続けたのだった。

明治四十年、「蒲団」で私小説の道を示し、自然主義文学の闘将として活躍した花袋も、そうした作家のひとりである。

深草の少将が小野小町のもとに通い詰めた故事になぞらえた題名が示すように、これはひとり  
の女への男のひたむきな愛の結晶を描いた作品である。主人公島田は花袋、お銀は花袋と二十年  
近く関係を持った芸者飯田代子よであり、それまでに書き続けた花柳界もの、愛欲ものの、いわば

集大成といえよう。

大正十二年の大震災により、それまでただ華やかに浮き浮きとその日を生きた花柳界の女たちの身の上も一変する。すべては崩壊し、かつての夢を結ぶよすがさえない。その中でお銀は島田の誠実な愛情に包まれ、来るころまで来たことをしみじみと思う。

十代の終わりに島田と出会ってから二十年間、芸者に真心を求め続ける島田に反発し、裏切りを重ねながらも切れることのなかった二人の関係だった。

島田にとつてもこの二十年間はすべてお銀との歴史だった。島田が作品の中で描く女はすべてお銀であり、執筆することも、金を稼ぐことも、文壇にその勢力を伸ばしたことも、すべて片側にお銀の存在があったからだった。

震災で身ひとつとなつたお銀を花柳界から退かせ、島田は二人の愛の金字塔を建てる思いで東京郊外に家を建て、その両親と共に住ませる。かつての嫉妬に身を焼くような苦惱も、愛欲にのたうつ思いも今は去り、静かに満ちてくる喜びの中で島田は二人の日々を、しみじみと思う。それは夕映えの美しさにも似た愛のありようだった。島田はすでに死を思う年齢にいた。

島田を信じながらもお銀は、ふと、囲われて生きることの不安に苛立つ。島田にもしものことがあつたらという怖れ、結婚生活をあきらめながらも未だ残る未練、女の盛りを過ぎていく身への焦りがある。

一方、島田の方も、この二十年間、家庭とお銀との二重生活を何とか続けてきたものの、今は成長した子供たちに怯えなくてはならない。夕映えの美しさの中で築き上げられた恋の殿堂に、